支え合うこと

北信越学生卓球連盟 幹事長 平井友也

　この度は、日本学生卓球連盟の新たな取り組みである日学連アゴラにおいて、このような初期に、拙文ながら掲載の機会をいただけましたこと、誠に感謝いたします。

　昨今、私の住む石川県では災害が続いており、落ち着かない日々を過ごしております。つい先日は豪雨の影響で、私の出身高校のすぐ裏手を流れる小松市の梯川が氾濫し、家屋の浸水など多くの被害がありました。また、6月には能登で大きな地震があり、不安な時勢が続いています。幸い、私が下宿する金沢市には甚大な被害は出ておりませんが、友人の家庭に関わる被害の報に触れ、胸のつぶれるような思いです。

　しかしこのような状況で感じるのは、支え合うことの尊さです。今回の豪雨では、8月4日に氾濫があったにも関わらず、つい2日後の6日には、市外からボランティアに多くの人々が集いました。私の大学でも学生ボランティアの準備が行われています。災害時に支え合うことの重要性は従来盛んに謳われてきましたが、今回の災害で遅まきながら、有事に限らず私たちの生活は支え合いで成り立っているということを実感しています。

　大学での部活も同様です。私は多くの人々に支えられ、又自分自身が組織の一助となりながら、部活や学連の運営に取り組んでいます。私は幹事長を務めていることもあり、部内では要職に就いていません。そのため体育館の確保や部費の管理など、他の部員の尽力のお陰で活動に取り組めています。部では役割分担があり、そのどれを欠いても活動が成り立ちません。これらの仕事は、見返りが生じるようなものではありませんが、私も含め各々が大学や学連の一助となるべく役割を全うしています。私たちの部活動はやはり支え合いによって成り立っているのです。

　支えあいとは、自らも支える機会があって成り立ちます。しかし、自分も奉仕しているからと支えられることを当然だと考えるべきではないとも感じます。常に自分が支えられていることに感謝し、自らの役割に精進することでその恩に報いて行けるよう努めなければなりません。学連運営では、幹事長という身に余る役への重責から、つい自分ばかり苦労しているように感じることもありますが、そんな時には他の部員や学連をご指導くださる理事の方々など、自分も多くの人々に支えられていることを思い返し、自らも誰かを支えるつもりで尽力していきたいです。